

花巻市地域おこし研究所

花巻市の民俗芸能における演者確保の新たな手法の構築 - 大償神楽における「通い神楽モデル」の開発と実践から -

2021年3月31日

花巻市地域おこし研究所
研究員 氏名 吉田 真彦

目次

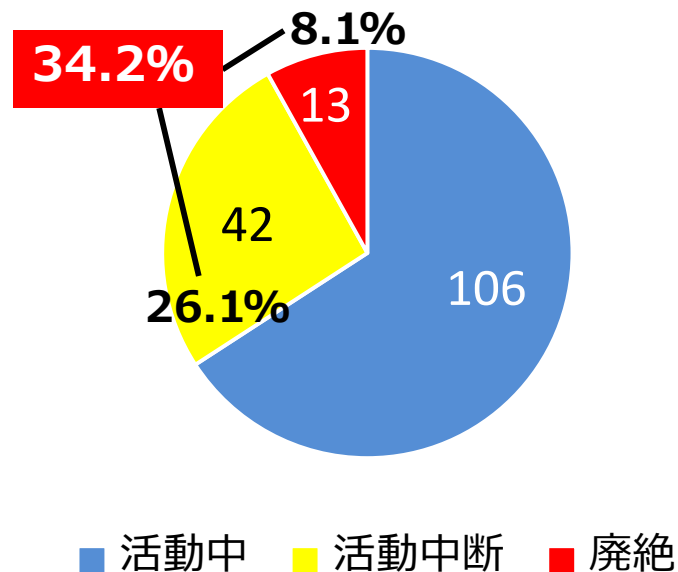
1. はじめに ープロジェクトの目的ー
 2. プロジェクトの概要と成果
 3. 「通い神楽」の構築と実践
 4. プロジェクトの実践・調査の結果
 5. 今後の課題と取り組み
-

はじめに ープロジェクトの背景と目的

- ・ 市内の民俗芸能の3分の1が活動中断・廃絶しており、民俗芸能が消滅に向かっている
- ・ 「活動中断が不安」な民俗芸能の不安要素である「後継者不足」の解決を図る

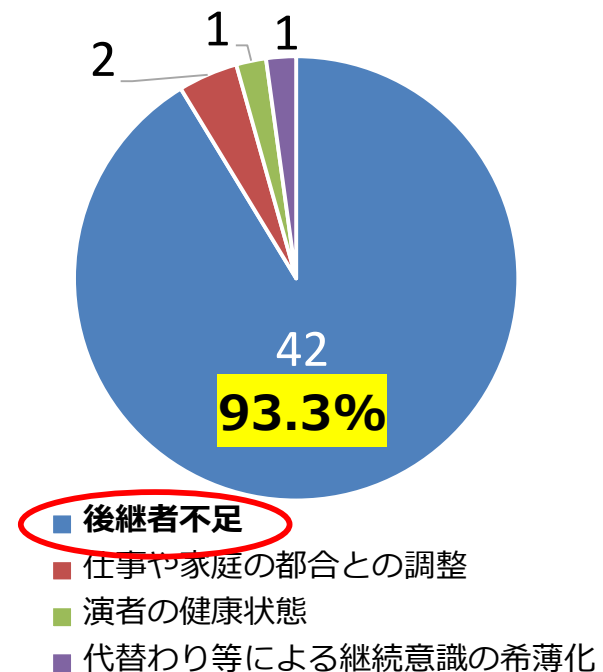
花巻市の民俗芸能の活動状況

(n=161)



今後の活動における「活動中断が不安」な理由

(n=45)



出典：文化財課提供資料よりグラフ作成

出典：平成29年度花巻市民俗芸能団体状況調査
結果報告書(グラフは研究者作成)
※活動中断に不安なしとしたのは30/80団体

本研究の概要

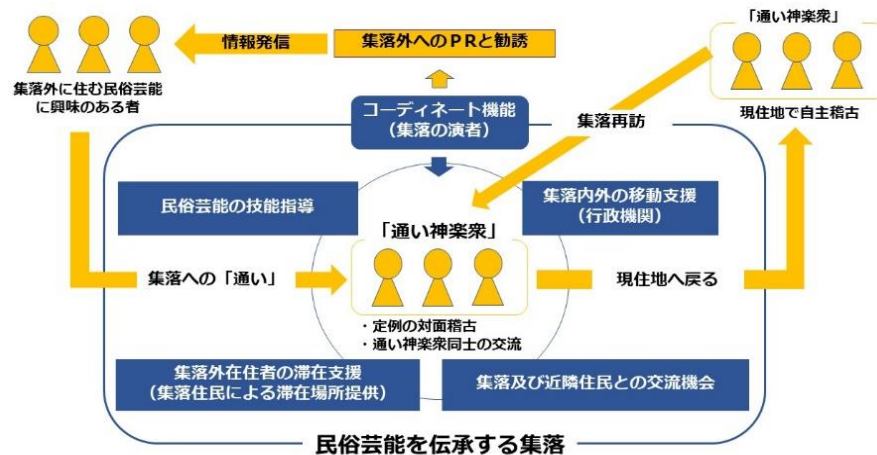
- ・ 民俗芸能における「集落外の演者」を確保する手法を構築
- ・ 行政機関の視点から演者不足を解決する政策を構築

プロジェクトの目的

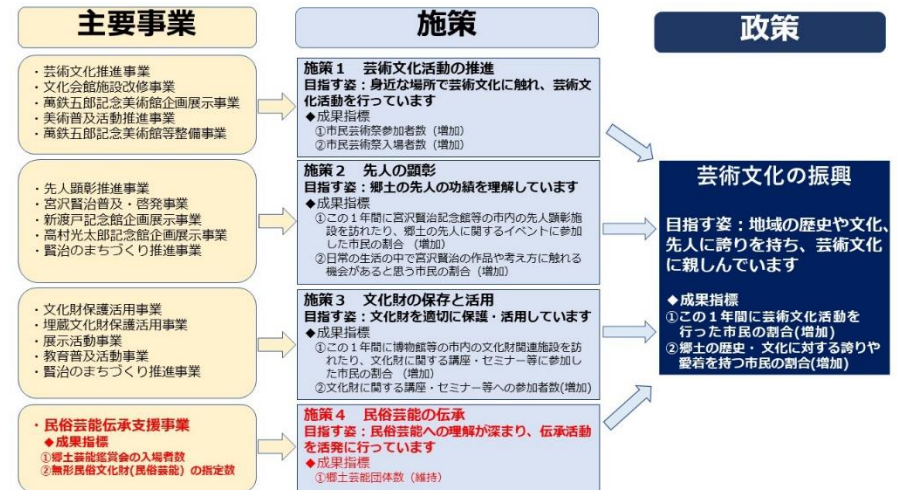
- ① 民俗芸能の演者を、将来にわたり持続的に確保するための新たな仕組みを構築
- ② 演者不足を解決するための行政機関の役割検討と政策提案

プロジェクトの概要

- ① 「集落外の演者」を確保する手法「通い神楽」を慶應義塾大学SFCの学生・研究員と「大償神楽」で実践・共同開発
- ② 花巻市の民俗芸能維持政策と民俗芸能団体による演者確保の実態に関する聞き取り・資料調査



通い神楽モデル



花巻市の民俗芸能維持政策の体系

本研究の成果と今後の展開

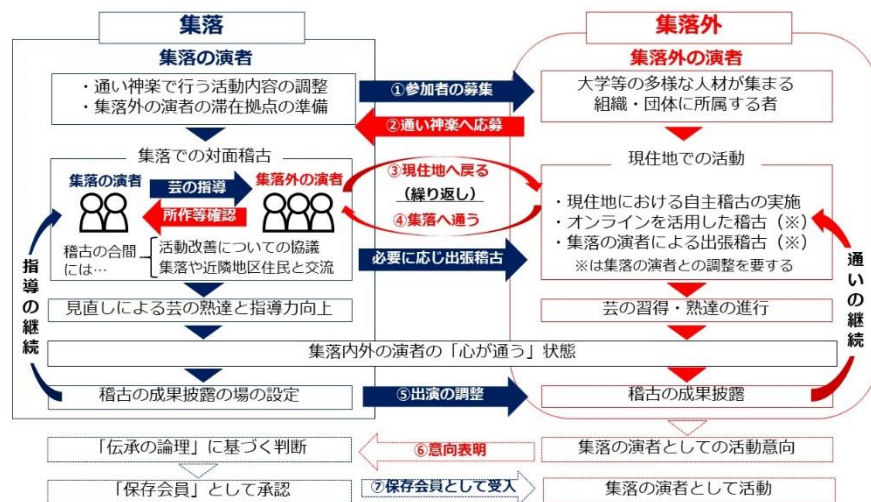
- ・ 花巻市における将来の演者確保を行う手法を構築する基礎を形成
- ・ 民俗芸能団体が展開する演者確保活動を支援する政策展開について協議

プロジェクトの成果

- ①大償神楽の演者及び通い神楽参加者による通い神楽への評価から「通い神楽」を改善し、将来の演者確保の手法の基礎を構築。
- ②花巻市における民俗芸能の演者不足に対処する政策や民俗芸能団体の活動における課題の抽出と政策の提案。

今後の展開

- ①新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、県内大学・企業等に「改善版通い神楽」を適用し、通い神楽の適用と改善を図る。
- ②民俗芸能団体による独自の演者確保活動に関する課題解決に資する政策の実装と実現について、市当局との議論・協議を行う。



改善版通い神楽モデル



通い神楽が目指す当事者間の関係

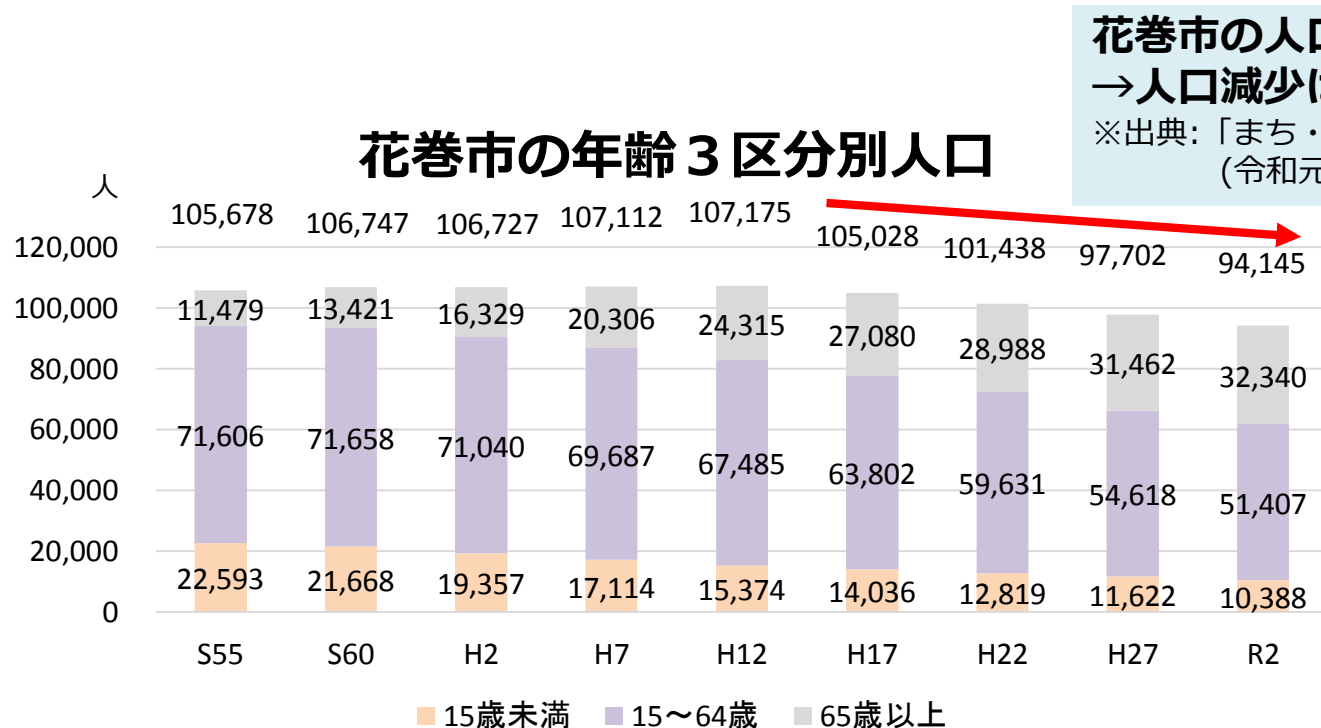
研究資料

研究背景 一 民俗芸能の演者不足の原因

- 原因は人口動態の変化、生業形態の変容とされる
- 人口減少が今後80年続くとされる中、指摘された原因を集落だけで解決するのは困難

演者不足の原因（1999,星野）

- ①人口動態の変化：地域の過疎化、少子化現象
- ②生業形態の変容：地域住民のサラリーマン化



**花巻市の人口は20年で1万3千人減
→人口減少は全国で80年続く(※)**

※出典:「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン
(令和元年改訂版),2019,内閣府

**集落も一層の
縮小が進む**

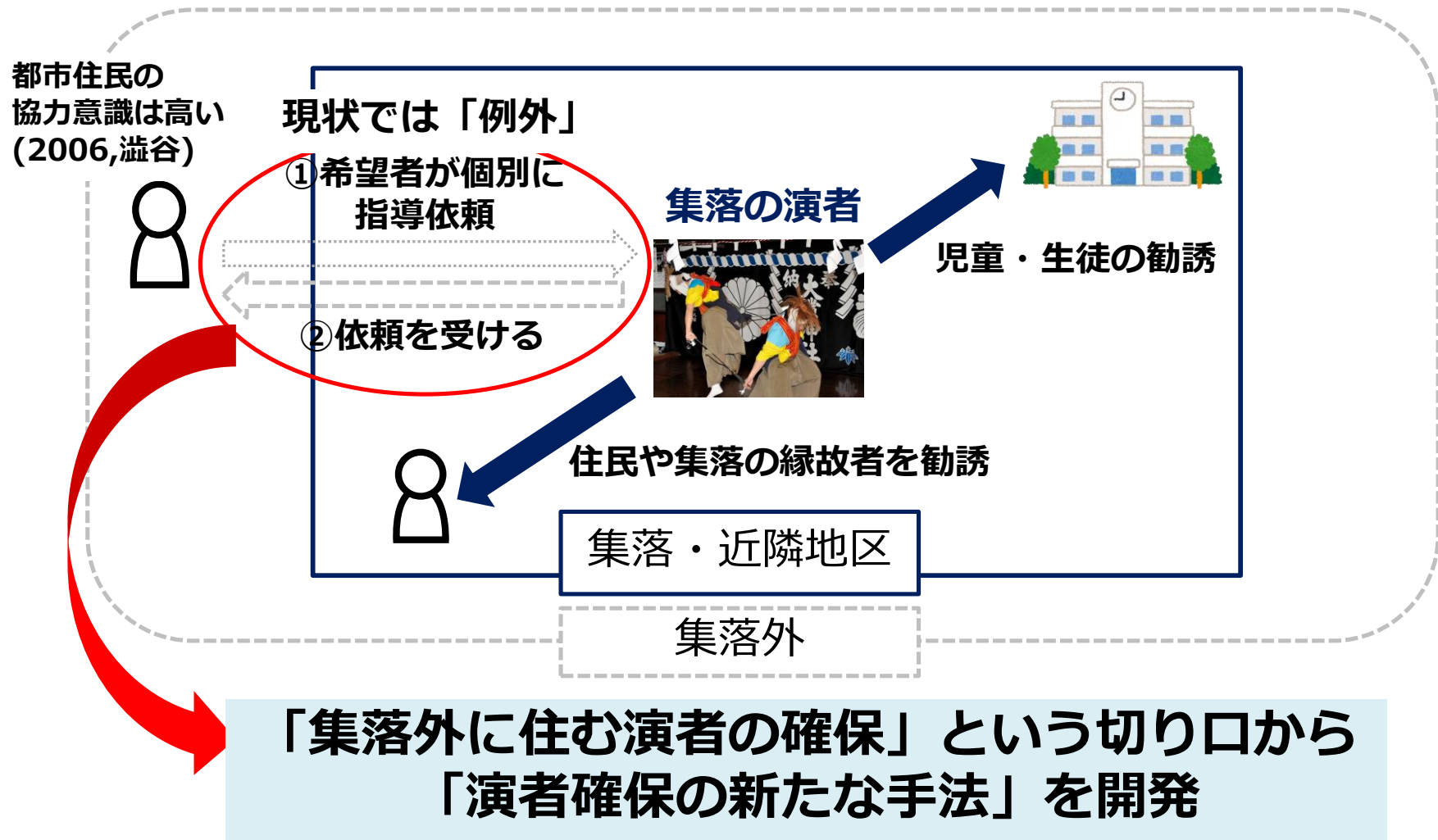
**集落だけでは
対処不可能**

「昭和55年～平成27年国勢調査結果」（総務省統計局）及び
年齢別人口集計表（令和2年9月末日現在）」（花巻市）を加工して作成

研究背景 一 本研究の目的と現在の演者確保の手法

- ・ 集落外に住む者が「演者になる」ことは例外
- ・ 本研究の目的は「市内民俗芸能団体の演者確保」に資する新たな手法の開発

現在の演者確保の手法



先行研究・事例 ー地方における「集落外の人材」の活動

- ・ 東日本大震災(2011)発災以後、地方と都市部の関わり方が変化
- ・ 民俗芸能の演者不足への対処に、集落外に住む者の力を得られる可能性を示唆

・ 国策による都市部から地方への人口還流の促進(2015～)

ーまち・ひと・しごと創生総合戦略による地方移住の促進

・ 東日本大震災発災 1 か月後に、沿岸部の民俗芸能が再開

ー集落外の人材による活動資金の支援・公演機会の創出(2015,橋本)

・ 当市における「ぶどうづくり隊」の活動

ー高齢化・担い手不足が進むぶどう栽培の作業を近隣他市町村の住民が支援(2015～,花巻市)

本研究の着想として…



**演者確保に「集落外に住む協力意識を持つ者」の
民俗芸能の持続的な参加が可能な仕組みを構築できないか？**

研究背景 一花巻市職員として、民俗芸能の演者としての問題意識

- 市職員としての自分は、「政策目的の達成」に資する民俗芸能の重要性を意識
- 演者としての自分は、神楽を続けていくために後進の確保・育成したいという意識



「市職員として」

民俗芸能を「政策目的
の達成」に活用



「大償（おおつぐない）
神楽の演者として」

神楽を続けるための
後進の育成・確保

2. 民俗芸能の演者確保に関する 先行研究

先行研究・事例 ー民俗芸能の演者確保に取り組む意義

- ・ 民俗芸能は、集落と人をつなぎ、地域を維持していく力を持つ
- ・ 民俗芸能の演者確保は「集落と人をつなぐ力」を維持することにつながる

集落の維持再生機能

- ・ 人が集い戻る機能(2014,阿部)
- ・ コミュニティの維持(2014,阿部)
- ・ 地域の再生機能(2015,橋本)
- ・ 地域の精神的支柱(2015,橋本)

×

民俗芸能の性質

- ・ 演者が地域の構成員(1998,小林)
- ・ 信仰・神事・祭りと不可分な形で演じられてきた(2014,笹原)

民俗芸能には、「集落と人をつなぐ力」がある

事例：東日本大震災発災の1か月後には、民俗芸能が再開(2015,橋本)

民俗芸能の演者確保＝「集落と人をつなぐ力」の維持

先行研究・事例 一 集落外の演者による活動の事例

- 「集落外に住む演者」が民俗芸能の伝承活動の活性化に寄与する事例が、県内にある
- 伝承活動に加わるという点では、解決を要する課題が残っている

民俗芸能名	演者の在住地	活動開始の契機	活動概要	集落外の演者の意識
下閉伊郡岩泉町 なかのななづまい 中野七頭舞 (阿部,2014)	北海道、東北、 関東、関西	東京民族舞踊研究会の依頼 による、 集落の演者主催の「講習会」 の開催(1993) ※以後、講習会は毎年のように開催	・ 在住地でのサークル活動 ・ 集落の演者との共演	・ 「地元でない人間（力量も大したことない）」なのに、「これが本物の七頭舞だ」と思われてしまう」 ・ 「地元の間人ではない自分たちが保存会と一緒に出演することはよいことなのだろうか」
遠野市 おおいではやちね かぐら 大出早池峰神楽 (澁谷,2006)	・ 市内(近隣他市からのIターン者) ・ 近隣他市町村	・ 神楽に加わった最初のIターン者による勧誘(1992) ・ 神楽体験を中心としたグリーンツーリズム	集落の演者との稽古、祭礼時の公演出演 ※祭祀行事は集落住民が担う「棲み分け」の構図	(Iターン者) ・ 「私たちだけが演じても地域の良さは伝わらない」 ・ 「永住を決めたわけではないので、いつまでできるか分からないが、できるうちはやろう」

集落外に住む演者の
活動開始契機は限定的

集落の演者が行う
伝承活動との「線引き」

3. 民俗芸能の演者確保プロジェクト 「通い神楽」の構築と実践

- 先行事例の課題を乗り越える「通い神楽」の概念と「通い神楽モデル」を構築
- 通い神楽モデルの実践により、「集落内外で共に改善する」仕組みの効果を検証

「通い神楽」の概念

①現住地からの「通い」による演者活動

②集落の演者主導で取り組む

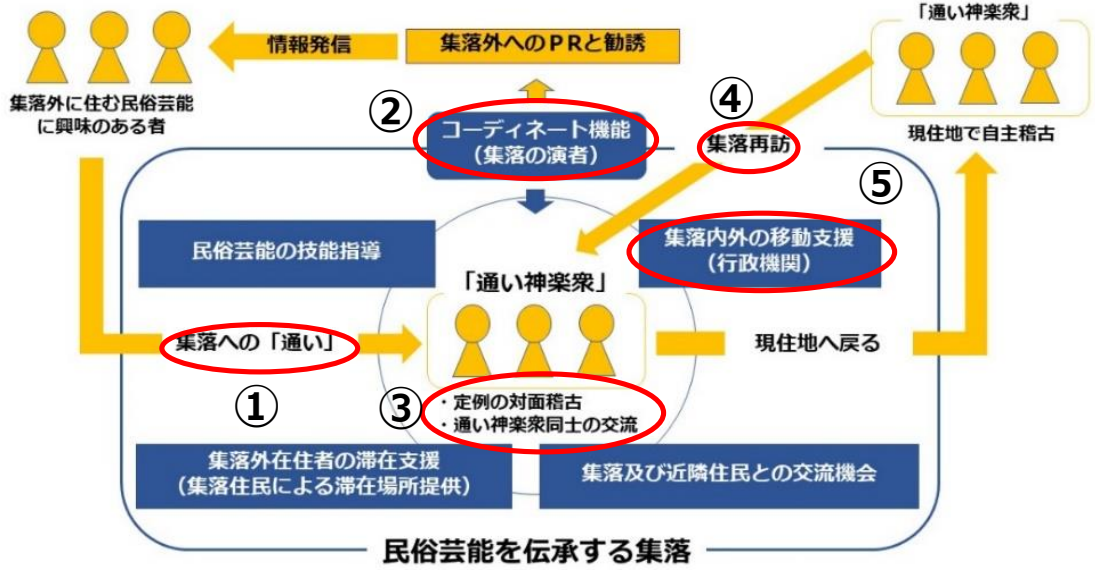
③体験だけではなく、民俗芸能活動に参加

④集落内外の演者が共に活動の仕組みを改善

⑤行政による「通い」のバックアップ

民俗芸能へ実装するモデル構築

「通い神楽」を市内の民俗芸能に実装し、実証実験による効果検証



研究プロジェクト概要①-2 ー通い神楽モデルの実証実験の設計

- ・ 慶應義塾大学SFC生の中から、ともにモデル構築を行う者を募集
- ・ 花巻市の大償神楽において、受け入れを実施

設計項目	設計内容
実施期間	2019年7月20日～2020年2月28日（7か月）
目的	通い神楽モデルによる「集落外の演者確保」に係る課題の抽出
実装対象(民俗芸能)の条件	a 集落外の演者に芸の指導が可能 b 演者確保を課題とし、演者の過半数が高齢者であること c 芸の習得に複数回の稽古を要する民俗芸能 d モデルの実践中でも、芸の指導方法や受入内容の調整が可能
参加対象(集落外の演者)の条件	A 民俗芸能の演者としての活動に興味を持つ者 B 実証実験期間に、集落に複数回通うことが可能な者 C 首都圏在住者
行政機関の支援	・ 参加対象への交通費補助 ・ 最寄りの交通機関から、集落への移動支援
実施内容	・ 集落外の演者の募集活動（2018年7月20日～8月19日） ・ 集落への通いによる対面稽古（9月～12月の間で4回：各回1泊2日） ・ 実証実験後のグループインタビュー（1月から2月：各1回）
収集データ	・ 参加対象の参加動機 ・ 実証実験中の発言・行動 ・ グループインタビューの記録
分析方法	S C A T (2008, 大谷) ※全国で22,528件ある民俗芸能の内、1事例の取り組みという小規模データを扱う

研究プロジェクト概要②-1 ー花巻市としての課題解決策の考案

- ・ 「演者確保の支援」という観点から、市の政策の実態調査
- ・ 花巻市の民俗芸能における演者確保の選択肢を増やす政策を提案

「演者確保」に対する政策の現状

- ・ 施策「民俗芸能の伝承」の課題
→ **人材確保・育成策検討の必要性**（出典：花巻市まちづくり総合計画第3期中期プラン）
- ・ 現在の事業は「公演機会の創出」と「小中学校への民俗芸能団体派遣」
→ **現在の演者が「活動を持続する」**ことが目的

現在の施策を踏まえ…

「演者確保を支援する」という視点からの政策提案

- ・ 「演者確保の支援」への作用という視点から、現在の政策についての
実態調査（担当者インタビュー＋資料調査）を実施
- ・ 「集落外の演者確保」という、人材確保・育成策の選択肢を作る上で、
市が果たす役割を政策として提案

研究プロジェクト概要②-2 ー花巻市における演者確保の取り組み調査

- ・ 花巻市における文化財保護行政の視点から、現在の演者確保の実態を把握
- ・ 市内の民俗芸能団体における演者確保の取り組みや、意識についての把握

調査対象	岩手県花巻市（実証実験の開催地）
実施時期	2020年9月25日（1回：1時間30分）
調査の目的	民俗芸能の維持保存政策の実態及び政策形成に係る根拠の収集
調査方法	①教育部文化財課へのインタビュー ※インタビュー前に、通い神楽モデルの取り組みを説明。 ②資料調査 ・ 民俗芸能団体との意見交換会の会議録 ・ 令和2年度事業説明資料 ・ 花巻市内の民俗芸能団体の活動状況 ・ 花巻市まちづくり総合計画第3期中期プラン
主な調査項目	(1) 民俗芸能の維持保存に関する事業内容 (2) 民俗芸能団体による演者の確保活動への支援の有無 (3) 民俗芸能団体の二ーズ・課題の把握方法 (4) 演者の育成・獲得に関する民俗芸能団体の意見 (5) 民俗芸能の維持保存政策に期待する成果 (6) 文化財の「活用」を踏まえた今後の政策展開

4. プロジェクトの実践・調査 の結果

プロジェクト①の実施結果 ー通い神楽モデル実証実験の参加者

- 参加者は6名。縁のある花巻（岩手）、民俗芸能、通い神楽の仕組みに興味あり
- 「通い神楽」による活動持続につながる改善点を提案

No.	氏名	所属	年齢	性別	民俗芸能の経験	予備知識	参加動機	通い神楽による活動持続の要因となる改善点
1	A	SFC研究所 上席所員	61	男	なし	○	早池峰神楽に仕事で関わり、 高い関心あり。ワインを中心 とした食の取組にも興味	・「通い神楽」を行う意義を 明確にする必要がある ・集落内外「双方向の通い」
2	B	SFC研究所 上席所員	25	男	なし	×	自分のルーツである岩手に身 を持って関わりたい	神楽という民俗芸能が持つ 性質も踏まえる
3	C	政メ修士 1年	23	男	あり (けんか祭り)	×	伝統的な祭り及び歴史の浅い イベントに外部からの参加者 が与える意味や参加者意識に ついて知りたい	・熱心な指導がありがたかつ た（C以外も同意見） ・興味のある役割で関われる のが通い神楽の魅力
4	D	政メ修士 1年	22	男	あり (阿波踊り)	×	新しい地方と都市住民の交流 の形として興味あり	成果を披露する機会があると、 続ける意欲が高まる (※計画したがコロナで断念)
5	E	総合政策 3年	20	女	あり (盆踊り)	×	研究フィールドも見据えて、 岩手県花巻市の民俗芸能に触 れて、体験したい	集落で通い神楽衆と再会する ことも楽しみの1つ (経験者のコミュニティ形成)

※倫理的配慮により、参加者氏名はランダムのアルファベット表記としている。

※6名中1名はデータ公開許可が得られず、研究対象外とした。

プロジェクト①の実施結果　ー実証実験の様子

- ・ 大償神楽で最初に習得する「三番叟（さんばそう）」の稽古
- ・ 全4回の中で、順番を最後まで習得することができた。



プロジェクト①の実施結果 ー通い神楽衆へのグループインタビュー

- ・ 集落外から、通い続けるために必要な要因の調査
- ・ 「通い神楽」の改善提案を行う場として設定

調査対象	実証実験に参加した通い神楽衆 4 名
実施時期	2020年2月25日（1回：2時間）※オンライン開催
目的	通い神楽モデルの改善に係る集落外の演者からの意見収集
調査方法	・ 研究者が進行 ・ インタビュー項目に沿って、自由な発言と意見交換を促す ・ 発言内容について記録（主にメモ）
主なインタビュー内容	（1）実証実験に参加した感想 （2）通い神楽モデルの実践で感じた課題 （3）通い神楽モデルの改善アイディア （4）2020年における通い神楽の活動の方向性

- ・ 通い神楽が、演者確保の手法に至るための課題は何か
- ・ 通い神楽によって、民俗芸能側が感じたメリットは何か

調査対象	大償神楽保存会員（出席 1 3 名）
実施時期	2020年9月21日（1回：1時間） ※新型コロナウイルス感染症による集会制限で2月までの実施困難
目的	通い神楽モデルによる取組への集落の演者の評価に関する意見収集
調査方法	・ インタビュー項目に沿って、保存会員による自由発言を促しながら、意見を収集 ・ 述べられた意見の中で不明な点は研究者が確認をしながら進行 ・ 保存会員間での意見交換や議論の内容も記録 
主なインタビュー項目	（1）通い神楽衆の活動に対する感想 （2）通い神楽による大償神楽へのメリット（デメリット） （3）保存会員から見た大償神楽に取り組む価値 （4）他地域の在住者が大償神楽の稽古に参加する上での課題

プロジェクト①の実施結果 ー通い神楽衆へのインタビュー分析ー

- ・ 通い神楽の回数を重ねると、自発的な芸の向上を目指す行動が生まれる
- ・ 通い神楽による活動を続ける上で必要となる具体的な要素が示された

SCATフォームによる通い神楽衆の発言・行動記録の分析（抜粋）

赤：集落外の演者を確保し、活動を持続する要因

ストーリーライン (現時点で言えること)



・ 通い神楽衆は、当初は民俗芸能の「1つの舞を習得する」ことに不安があったものの、1回目の対面稽古終了後、**通い神楽衆による自主的な稽古**や、**新たな芸の習得方法の開発**等、現住地においても自らの芸の向上を図ろうとする行動が起こった。

・ 最終回の第4回が終了した際には「**集落の演者の皆さんが熱心に指導してくれてありがたかった**」「今後も大償神楽に通い続ける方法を考えたい」といった発言が複数の参加者から見られた。

・ 実証実験の終了後に実施したグループインタビューでは、通い神楽を継続する上で、**通い神楽による活動意義の明確化**、「通いを中断した際の対応」「通い続けるための**モチベーションの維持・向上のための成果披露の機会創出**」、「**民俗芸能の経験を持つ者同士のコミュニティ形成**」「集落の演者も通って指導する、**双方向の通い**」等の必要性が、通い神楽モデルの改善時に集落の演者の協議を要するものも含めて示された。

プロジェクト①の実施結果 ―大償神楽保存会へのインタビュー分析―

- ・ 通い神楽は、集落の演者に対し自らの芸を見直し昇華させる契機となりうる
- ・ 通い神楽による演者確保を行うには、物理的・技術的制約をクリアする必要がある

S C A Tフォームによる大償神楽の演者の発言・行動記録の分析（抜粋）

赤：演者確保における課題 / 青：通い神楽モデルの実装による利点

ストーリーライン
(現時点で言えること)



通い神楽モデルは、**演者確保の手段としては地理的、時間的制約**が懸案となるという指摘があった。一方、「**自分が教えている内容が大償神楽として正しいか**」と**を振り返る契機**であること、通い神楽衆の発想から、**芸の習得について見取り稽古以外の有効な手法に対する気づきを得られた**、としている。

また、**真剣に神楽の稽古に取り組んだ人が地域との橋渡し役になり、神楽の存在や魅力を広めてくれることに期待**している。さらに、通い神楽衆が「**真剣に稽古に取り組んでいる**」ことが伝わると、**真剣に指導しなければならない**という意識が芽生え、**稽古を通じて「心が通う」**状態が生まれていた。

集落外の演者の受け入れには、複数の会員が必要性感じているが、集落住民が守ってきた歴史を尊重し、**集落住民で守っていくのが基本である**という意見もあった。

また、**芸が上達しないことによる自然淘汰**も懸念され、**本当に好きで、自主稽古を重ねながら、芸の向上を図るくらいでなければ続かない**という声もあった。

そして、集落外の演者が伝承活動に参加するには、大償神楽を**稽古し続け、活動に参加し続けられるかどうか等を、保存会員が見極める基準が必要**と考えている。

プロジェクト①の実施結果 ー大償神楽における通い神楽モデルの評価

- ・ 通い神楽モデルを演者確保の手法とするにはいくつかの課題がある
- ・ 集落外に住む演者が「保存会員」となるには、現保存会員が持つ基準による見極めが壁

【利点としての評価】

- ・ 自らの芸を振り返る契機
- ・ 稽古手法への気づき
- ・ 大償地区と首都圏をつなぐことへの期待

【演者確保上の課題】

- ・ 時間的・距離的制約
- ・ 芸の巧拙による淘汰を懸念
- ・ あくまで集落の演者が中心

外部からの依頼による公演や
祭礼行事への出演

舞や楽器の演奏技術の稽古を継続

『保存会員』としての集落の演者の承認

伝承活動
への参加

新型コロナウイルス感染症
拡大により断念（2020.8に計画）

集落の演者が持つ判断基準による
『保存会員』とする上での判断

演者としての
見極め

実証実験での到達点

集落の演者が主催する自主公演等での成果披露

集落外の演者の芸の熟達と集落の演者との関係構築

集落外の演者による自主稽古
(集落の演者によるオンライン指導の併用も試みる)

通いによる集落での対面稽古
(集落の演者による直接指導

通い神楽体験会への参加

集落の演者による集落外の演者の募集

通い神楽モデルによる
取組が可能な内容

- 行政の支援は、民俗芸能団体の要望・意見に基づく公演機会の創出が中心
- 民俗芸能団体においては、地元・近隣の学校を中心の演者確保の支援を必要としている

民俗芸能団体

花巻市



民俗芸能を披露する場

行政から学校への働きかけ

子供たち、若い人が楽しくできる環境づくり・気を引く工夫

出典:民俗芸能団体の意見交換会記録
(花巻市,2018,2019)

これらの要望は…

集落・近隣地区・学校から演者を確保して活動を維持したいという希望

この希望のこだわりが生む現状

- 集落に人がいないから、どうにもならない（集落外から人を入れてでも、というマインドではない）
- 類似する民俗芸能団体との合同での活動は展開（現在の演者同士）

要望



- 民俗芸能の周知と団体の活動意欲(の維持)
- 公演や練習を通じて興味を持ってもらい、あわよくば後継者に入ってもらう

実行する支援策

- 民俗芸能の公演を主催**
- 小中学校への民俗芸能団体派遣

見解



- 実際どうしていいか分からないっていうことなんだと思います。皆さん、学校に行ってまず見せて、どれだけ児童・生徒を釣り上げられるかに期待して活動しているってことなんでしょうね。
- 若い演者に聞いても学校かなって。
- 市としても現状では、これ以上に打つ手がない（支援が限界である）ので。

プロジェクト②の実施結果 — 演者確保の手法を拡張する考え方 —

- ・ 新たな演者確保が進まないのは、民俗芸能団体が手法を広げる契機がないからでは？
- ・ 「集落外に住む演者との活動経験」が演者確保の手法の拡張を促すのではないかな？

【調査結果】

- ・ 民俗芸能団体は、集落や近隣住民による民俗芸能の活動持続を希望
- ・ 公演や学校への派遣によって「興味を持った者」が演者となることを期待
- ・ 市・民俗芸能団体共にこれまでのやり方以上に、演者確保の手法を持たない

先行研究(湍谷,2006)では…

集落外に住む演者確保が進まない原因

- ①集落外に住む演者への指導は負担大
- ②演者として定着するかを疑問視
- ③集落では「どうにかなる」と楽観視

そうした原因もあるが…

演者確保の手法を広げる契機が無いことも理由ではないかな？

推測の理由は…

- ・ 先行事例である「**依頼**」から始まった、集落外に住む演者の活動は**今も持続**(2018,大正大学地域構想研究所)
- ・ 大償神楽も**同様の経験有**→**通い神楽を受入**
- ・ 通い神楽参加者は**通い続けるためには、「活動の意義」が必要とする**

つまり…

集落外に住む演者との活動経験が、演者確保の手法の拡張を促すのでは？

このことから…

民俗芸能団体が以下の課題を解決することで、演者確保の手法が広がるのではないかな？

- ④演者確保に関する知見の不足
- ⑤意義や醍醐味等の情報発信の不足
- ⑥伝承の論理を見直す機会の不足

プロジェクト②の実施結果 ―演者確保の手法構築の支援策の方向性

- ・ 集落外の演者確保が進まない原因について、理由と支援の可能性を検討
- ・ ④～⑥について、行政による支援が効果的である可能性があり、支援の方向性を導出

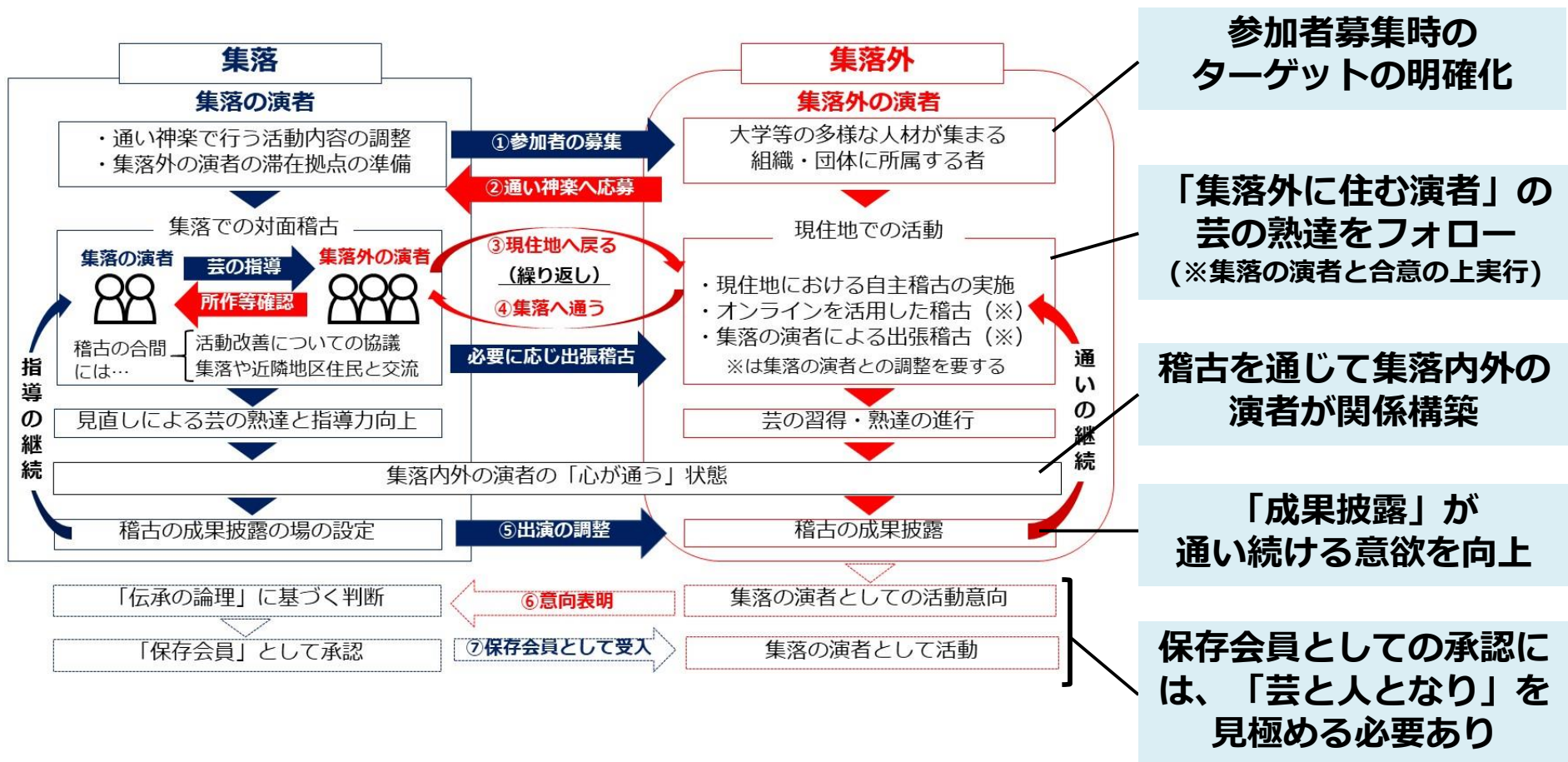
集落外の演者確保が進まない原因	原因が生じる	行政機関による原因解消の可能性	行政機関が果たす支援の方向性
①集落外の演者への指導は負担大	不明	理由不明のため、現時点では困難	—
②演者として定着するかを疑問視	不明	理由不明のため、現時点では困難	—
③集落が「どうにかなる」と楽観視	今はできないが、過去に演者の経験があり、やればできると思っている(2006,澁谷)	集落住民の生活や意向に左右されるため、現時点では困難	—
④演者確保に関する知見の不足	既存の演者確保の手法以外を考える契機の不足	行政機関が有する演者確保事例等の情報提供	演者確保の手法に関する情報収集・提供及び学習機会の創出
⑤意義、醍醐味等の情報発信の不足	民俗芸能の持つ意味などを言語化して伝えることに限界あり(2007,佐々木)	演者が有する情報整理や発信の支援	集落の演者が行う民俗芸能の情報発信の場づくり
⑥伝承の論理を見直す機会の不足	既存の演者確保の手法以外を考える契機の不足	契機を得るための活動内容により可否あり	民俗芸能団体が新規に行う演者確保の取り組みの側面支援

5. 本プロジェクトの成果と 今後の課題

プロジェクトの成果① ー集落外に住む演者の活動手法の基礎を構築

- ・ 通い神楽モデルでは「参加者の募集」から「成果披露」までが実現可能(＝現時点の限界)
- ・ 本モデルは、民俗芸能の新たな演者確保の手法の基礎となる

改善版通い神楽モデル



プロジェクトの成果② ー演者確保の手法を生み出す支援策

- ・ 演者確保の手法開発・実践を促進する支援を段階的に実施
- ・ 民俗芸能を様々な分野の政策に活用することを視野に入れて展開

行政による 支援（案）の 概要	意図	具体的な事業	期待される成果 (成果の把握方法)
①演者確保の手法に関する情報収集・提供及び学習機会の創出	集落の演者が、 演者確保の新たな手法を検討 している	・ 演者確保の先進事例の調査研究 ー結果を意見交換会等の場で情報提供 ・ 先進事例や手法に関する学習会開催 ー民俗芸能団体の希望による講師調整	演者確保の新たな手法を検討する民俗芸能の増加 (民俗芸能団体へ質問紙調査)
②集落の演者が行う民俗芸能の情報発信の場づくり	集落の演者が、民俗芸能の意義や価値を理解し、 演者不足解消につなげよう としている	・ 行政の情報発信媒体の活用 ー公演情報の他、演者の思い、公演や稽古の様子等を発信 →広報、HP、SNS、市外在住者向けのサイト（移住定住、観光、シティプロモーション等）への掲載	・ 民俗芸能との接点を持つ者の増加 (主催公演の来場者数、SNSのいいね!数、HP閲覧数等) ・ 政策への活用促進 (各部署への照会)
③民俗芸能団体が新規に行う演者確保の取り組みの側面支援	集落の演者が、 演者不足解消の手法を開発・実行 している	・ 集落の演者による演者確保の実践支援 ー連携する大学・企業等へ参加者募集のアプローチを仲介 ・ 集落外の演者の成果披露会の開催支援 ー会場確保や学校・関係団体等へ案内	民俗芸能の演者活動への参加者増加 (支援事例の追跡調査)

プロジェクトの成果③ ー通い神楽モデルと提案した支援策の価値

- ・ 民俗芸能が持つ「集落の人が集まる」「集落に人が集まる」機能の維持
- ・ 「花巻」を構成する集落を守り続ける方法を考える基礎を構築

民俗芸能が持つ人への訴求力

- ・ 人が集い戻る機能(2014,阿部)
- ・ コミュニティの維持(2014,阿部)
- ・ 地域の再生機能(2015,橋本)

×

- ・ 信仰・神事・祭りと不可分な形で
演じられてきた(2014,笹原)

集落の人が集まる＋集落に人が集まる・とどまり続ける機能

「通い神楽」の価値

- ・ 民俗芸能の演者確保の新たな手法と
の選択肢の提示
- ・ 「民俗芸能の演者」としての花巻市
への人の流れを作る可能性の示唆

花巻市が支援する価値

- ・ 市内の民俗芸能団体における「将来の
演者確保」に対する不安の解消
- ・ 民俗芸能の「価値」を問い直し、市の
政策への活用を促進

「花巻」を構成する集落を守り続ける方法を考える基礎を構築

今後の展開

- 演者確保の新たな手法を構築するための手法の基礎を構築
 - 花巻市として「演者不足の解消」に取り組むための具体的な政策を形成
-

- **改善版通い神楽モデルの実践による一層の改善**

- 県内大学・企業等をターゲットにした実証実験の設計と実践
- 通い神楽衆第1期生とのモデル共創の継続
- 新型コロナウイルス感染症の状況を注視し、モデル普及方法を検討

- **政策として実行する妥当性と効果の検証**

- 民俗芸能団体の演者確保支援の政策について、引き続き議論し、モデル実装に向けた市との協議の継続
- 文化財保護の視点だけではなく、民俗芸能をフックにした花巻市への人の流れをつくるという成果を生み出すためのアプローチの検討
-

おわりに ー地域おこし研究所の活動で得られた成果

- ・ 自分にとっての民俗芸能の「常識」をリセットし、多様な見方を身に着ける
- ・ 常に5W1Hを問い続け、根拠をもって答えを出すための方法・姿勢を得た

- ・ なぜ民俗芸能を伝承しつづけることが必要なのか？
- ・ 行政が「民俗芸能の維持存続」を支援する必要性は？
- ・ 「民俗芸能の演者不足」になると何が困る？

大学院派遣研修(R2-R3)での学び



「講義」は価値を認識・
生成するトレーニング



先行研究・事例・データから
「問題の本質」を取り出す



研究の「価値」（面白さ）を
議論して磨き上げる

**様々な「問い」に根拠をもって答えを出す姿勢と、
政策立案を行い、実践する方法を学ぶことができた。**